大阪市における市民に好まれる風景の空間構成および移ろい性に関する研究

A Study on Landscape Constitution and Temporal Change of Favored Scenery by Citizen in Osaka City

下村 泰彦* 有本 幸代** 王 蕊* 増田 昇*

Yasuhiko SHIMOMURA Sachiyo ARIMOTO Rui WANG Noboru MASUDA

Abstract : The purpose of this paper is to clarify the spatial structure and the characteristics of temporal change of the favored scenery based on a questionnaire survey of the citizen in Osaka City. As a result, the following becomes clear. About the characteristic of the favored scenery, many of the elements of "the figure" are the artificial things as a landmark. The natural objects such as the lay of the land and greenery become "the background" and support the scenery as the base. The viewpoints of these scenery are in the open space or on the bridge related the peculiar topography of Osaka. On the other hand, a mass of greenery can be the element of "the figure" even if "the figure" is the natural object. Regarding the temporal change of the scenery, it is important to preserve the viewpoints both in coastal area and on the plateau, as the citizens are fond of a natural phenomenon like a setting sun. Regarding the temporal change of the scenery in a year, the elements of the spring are limited to some plants like a cherry tree along the Okawa River. On the other hand, the elements of fall are limited to some plants like a ginkgo along the Midotsuji Boulevard. Furthermore the various elements can be felt in this season.

Keywords: scenery, viewpoint, target of view, figure and ground, temporal change of the scenery, Osaka City

キーワード: 風景, 視点場, 視対象, 図と地, 移ろい風景, 大阪市

1. はじめに

視覚的な景観の快適性や自然環境が供給するうるおい性を有した地域固有の都市空間形成の重要性が再認識されている。美しい国づくり政策大綱（H.15.7）においても、「地域の美しさが地域の歴史、文化、風土などに根ざし、また、美しさに対して多様な捉え方があることを踏まえると、地域の景観の現状やコンセンサスの程度によりこの問題に対する取り組みのあり方が異なってくる」としており、都市の個性化に向けては、そこに暮らす人々にとって愛着のある地域に根付いた空間形成が課題といえる。

従って、都市生活者が好ましいと評価する風景の空間構成や地域性の創出に係わる時間・季節の移ろいの変化を探ることは、今後の都市景観計画や政策を考える上での、基礎的資料の蓄積という点において意義あるものと考えられる。

この様な背景のもと、都市空間を対象とした既往研究をみると、居住者意識との関連性については、居住者の記憶にある空間イメージと都市空間との関係性を探った研究¹⁾や、移ろいの変化に関連する気象現象を成因として生じる景観現象に対する感覚印象の操作の可能性について探った研究²⁾がみられるが、空間構成についての言及が少ない。また、都市景観における「図」と「地」の認知現象を探った研究³⁾や、江戸名所図会に描かれた歳時記的要素から都市空間を捉え、時間・季節の移ろいの変化が感じられる要素を生かした都市空間論の構築を目指した研究⁴⁾等の非常に興味深い論文がある。これらは景観の視対象や移ろいの変化を扱ったものであるが、視点場との関係の解明が希薄である。

そこで、本研究では、都市における風景を構成する客体としての視対象と、認知する主体の位置である視点場との関係に着目して研究を進めるものとした。具体的には、都市化が進行した大都市である大阪市において、市民を対象に実施された大阪市内のお気に入りの景観調査をもとに、市民に好まれる風景の空間構成に係わる特性や移ろい風景の特性を把握することを目的とした。

2. 研究方法

(1) 調査対象風景の抽出方法

本研究では、大阪市が指定景観形成物指定（著者1名が部会長）の基礎資料作成のために市民に対して実施した「わたしのまちの“お気に入りの景観”」調査データを用いた。本調査は大阪市全体でみた“お気に入りの景観”と身近な“お気に入りの景観”別にハガキ、FAX、Eメール、封筒にて募集（H.13.12～H.14.2）したもので、各“お気に入りの景観”の場所・名称、魅力の中心とその選択理由について自由記入方式で回答が求められている。本研究では、大阪市全体でみた“お気に入りの景観”を使用し、その中から、1つの景に対して複数人が回答したもので視点場と視対象が明確にわかるものを調査対象風景として特定した。なお、自宅ベランダやホテルの個室といった特定の市民しか享受できない視点場から捉えた風景は除いた。その結果、有効回答数604件の内、市民に好まれる風景として131景を抽出し、これらの写真撮影を焦点距離35mmのカメラレンズを用いて平成15年9～11月に行った。撮影時の視点場は、自由記入方式での回答内容から特定し、撮影対象（視対象）は“魅力の中心”に記載された風景の選択理由をもとに特定した。その際、夕日や朝日等の選択理由など1日の時刻が限定された場合は該当する時刻に撮影した。しかし、四季の変化・花見など調査期間に撮影できないものもあったが、空間構成を対象とした本研究には支障ないと判断した。

(2) 好まれる風景特性の把握方法

好まれる風景の特性は、撮影した写真を用いて視点場、視対象、視覚特性、移ろい風景の4項目から捉えた。視点場は、位置、場の特性、視線の角度から捉えた。視点場の位置は、地形、水系をベースに、都市計画図（1：30000）より臨海部、商業・業務地域を考慮して分類し、地形図上にプロットするとともに出現景数をカウントした。場の特性はオープンスペース（以下OSと表記）、橋、道路、乗り物、建築物の5項目に分け、視線の角度は俯瞰、仰視、水平方向とその組み合わせに分けて出現景数をカウントし

*大阪府立大学大学院農学生命科学研究科 **都市基盤整備公団東京支社

た。視対象は、地形と、「図」および「地」を構成する要素に分け、さらにそれぞれ自然物と人工物に分けて捉えた。視覚特性は、視点場の位置ごとに「図」と「地」の自然物・人工物の組み合わせとの関係から捉えた。なお、ここでは既往研究³⁾を参考に、「図」を風景の中で主対象として注目し存在を認識したもの、「地」を「図」の背景にあるもの、背景として意識されたものと定義した。移ろい風景は、日変化や季節変化など時間経過とともに変容する風景として、アンケート調査の“魅力の中心”の選択理由から捉えた。日変化は1日を朝、昼、夕、夜の4つの時間帯に分け、時刻変化を感じない昼を除き、単独の時間帯で時刻変化を感じる朝、夕、夜の3時間帯と、複数の時間帯にわたり時刻変化を感じる時間帯の組み合わせに分けて、それぞれ出現する要素数と景数を捉えた。さらに、季節変化は四季に分けて、単独の季節変化を感じる春、夏、秋、冬と、複数の季節変化を感じる四季の組み合わせで捉え、それぞれ出現する要素数と景数を捉えた。

3. 結果および考察

(1) 好まれる風景の特性

(i) 視点場について

・視点場の位置と場の特性：(図-1, 図-2 参照)

視点場は、地形や水系により、臨海部、市街地(商業・業務地域)、河川、台地に分けられ、さらに河川はスケールや歴史的形成過程が異なる新淀川(1909年開削)と都市河川(堀を含む)とに分けることができた。なお、市街地内にあっても河川や台地に位置するものは河川や台地に分類した。その結果、抽出された131景中、都市河川が39景と最も多く、大川沿いや中之島周辺に多く分布していた。次いで台地と市街地とが31景と多く、台地では大阪城周辺、市街地では大阪駅周辺に多く分布し、臨海部は18景で、天保山やWTC周辺に多く分布し、新淀川は12景と少なかった。

図-1 大阪市における好まれる風景の視点場の位置

図-2 視点場の位置と場の特性

場の特性をみると、全体としてはOSが44景(33.6%)と最も多く、橋が29景(22.1%)、道路が24景(18.3%)と多い。視点場の位置別にみると、都市河川においては橋が25景(64.1%)と最も多いのに対し、新淀川は総数が少ないもののOSが6景(50.0%)と多い。同様に臨海部でもOSが8景(44.4%)と多い。台地では、OSが15景(48.4%)、道路が9景(29.0%)の順に多いのに対し、市街地では道路が11景(35.5%)、OSが9景(29.0%)の順に多い。

・視線の角度：(図-3 参照)

全体をみると、水平な角度が57景(43.5%)と最も多く、俯瞰が33景(25.2%)、仰瞰が23景(17.6%)と多く、俯瞰+水平は12景と続いている。視点場の位置別にみても顕著な差異はなく全体傾向とほぼ同様に水平な角度が最も多い。しかし詳細にみると、都市河川は俯瞰+水平が7景(18.0%)、仰瞰+水平と俯瞰+仰瞰がともに2景と、視線の角度が他の視点場よりやや多様であるといえる。

以上のことから、中之島周辺や大川などに掛かる橋を視点場とした風景が多いことから、水の都といわれた大阪の特徴が受け継がれている。また、水平方向の視線が多いことは、大阪の起伏の少ない地形構造が反映されている。特に、河川で俯瞰や水平方向が多いことは流軸方向への視線を裏付けるものといえる。上町台地や大阪湾の臨海部では、風景の5割弱がOSであり、建て詰まりのない広がりのある場所が選択されていた。

(ii) 視対象について

・地形：(図-4 参照)

視対象の地形は、平坦地形、河川流路、港湾、河川合流・分岐点、台地・崖、丘、池、山脈、干潟の9項目に分類できた。平坦地形が49景(37.4%)と最も多く、河川流路が43景(32.8%)、港湾が16景(12.2%)、河川合流・分岐点と台地・崖は5景(3.8%)と続いている。

従って、大阪の特徴である平坦な地形が捉えられることや河川流路、河川合流・分岐点、港湾、池、干潟などの水面に関連したものが多くのも特徴であった。さらに、上町台地といった微地形も僅かながら捉えられており、風景に地形が組み込まれている。

・「図」の要素：(表-1 参照)

「図」の要素を自然物と人工物で比較すると、人工物が75景、自然物が56景であり人工物が多い。人工物を要素別にみると、街並み等の建築物群が23景(30.7%)と最も多いものの、橋(16景：21.3%)や高層建築物群(11景：21.3%)、城(10景：13.3%)

図-3 視線の角度

図-4 視対象の地形

表－１ 「図」と「地」の要素

分類項目	「図」の要素	合計	%	「地」の要素	合計	%
自然物	公園植栽	14	25.0	河川水面	24	31.2
	河川沿い植栽	14	25.0	公園植栽	20	25.9
	道路植栽	11	19.5	河川敷	14	18.2
	夕日	7	12.5	海	13	16.9
	河川敷	3	5.4	山並み	4	5.2
	河川水面	2	3.6	池水面	2	2.6
	池水面	2	3.6	－	－	－
	山並み	1	1.8	－	－	－
	坂	1	1.8	－	－	－
	海	1	1.8	－	－	－
人工物	計	56	100	計	77	100
	建築物群	23	30.7	道路の路面	24	44.4
	橋	16	21.3	建築物群	19	35.2
	高層建築物	11	14.7	園路	7	13.0
	城	10	13.3	埋立地	2	3.7
	建築物	5	6.7	広場	2	3.7
	広場	4	5.3	－	－	－
	タワー	2	2.7	－	－	－
	その他	4	5.3	－	－	－
	計	75	100	計	54	100
総計					131景	

表－２ 視点場の位置と視対象の要素

視点場	視対象	視対象の要素				計
		「図」が自然物 「地」が自然物	「図」が人工物 「地」が人工物	「図」が自然物 「地」が人工物	「図」が人工物 「地」が人工物	
臨海部		8	0	6	4	18
		44.4	0.0	33.3	22.2	100
		10	6	10	5	31
台地		32.3	19.4	32.3	16.1	100
		2	2	7	1	12
		16.7	16.7	58.3	8.3	100
河川	新淀川	12	5	14	8	39
	都市河川	30.8	12.8	35.9	20.5	100
		2	9	6	14	31
市街地		6.5	29.0	19.4	45.2	100
		34	22	43	32	131
		26.0	16.9	32.8	24.4	100
全体						

%)等の単体建造物がほとんどである。自然物では公園植栽と河川沿い植栽がともに14景(25.0%)と最も多く、道路植栽が11景(19.5%)と多い。

・「地」の要素：(表－1参照)

「地」を構成する要素を自然物と人工物で比較すると、自然物が77景、人工物が54景であり、自然物が多い。自然物では河川水面が24景(31.2%)と最も多く、次いで公園植栽が20景(25.9%)、河川敷が14景(18.2%)となっている。人工物をみると、道路の路面が24景(44.4%)と最も多く、次いで街並みといった建築物群が19景(35.2%)である。

従って、視対象の要素では人工物が「図」となる景観が多く、ランドマーク的な高層建築物や城、橋といった単体建造物、街並みといった建築物群が捉えられている。自然物は公園植栽や河川敷の植栽などまとまった緑空間であった。「地」となる要素は河川水面や海、河川敷などの自然物が多く、高層高密度化した都市内部では、大川や中之島周辺の河川が視点場において視対象を全体的にもしくはバランスよく見渡せるための重要な空間であり、いわゆる引き空間を提供しているといえる。路面も「地」として多く捉えられており、引き空間として重要であるといえる。

(iii) 視覚特性：(表－2参照)

全体傾向を捉えると、「図」の要素が人工物で「地」の要素が自然物である場合が43景(32.8%)と最も多く、「図」と「地」がともに自然物である場合が34景(26.0%)、「図」と「地」がともに人工物である場合が32景(24.4%)と続き、「図」が自然物で「地」が人工物である場合が22景(16.9%)と最も少なかった。視点場の位置別にみると、臨海部、台地および都市河川は、「図」の要素が自然物か人工物であるかに係わらず「地」の要素が自然物である場合が30%以上と多くなっている。新

淀川は、全体で12景と少ないものの「図」が人工物で「地」が自然物の場合が7景(58.3%)と多い。これらに対し、市街地は「図」が自然物か人工物であるかに係わらず「地」の要素が人工物である場合が多い。特に、「地」の要素が人工物の場合、「図」も同様に人工物である場合が14景(45.2%)と多くなっている。

以上より、「図」の要素が人工物か自然物であるかに係わらず「地」が自然物である風景が好まれる。この傾向は、特に水系の自然物がある臨海部や都市河川、樹林が豊かな台地で顕著であった。一方、市街地では「図」の要素に係わらず「地」が人工物である場合の方が比較的多かった。これらは「図」の要素が「地」の要素より際だって魅力的と判断される場合であるといえる。

(2) 移ろい風景の特性

(i) 日変化について

・日変化の要素(図－5参照)

日変化を感じる要素をみると、出現した60個のうち夕方が30個と半数を占め、そのうち夕日(17個)や夕景(12個)といった自然現象が27個と大部分を占めている。一方、夜は27個であり夕方に次いで多く、その大部分が夜景などの照明(16個)、建造物へのライトアップ(9個)といった人工による現象であるのが特色である。朝は、朝日の2個といった自然現象のみである。

・視点場と日変化による移ろい風景との関係(表－3参照)

全体では、日変化を感じる風景が65景であり、昼の風景の66景(50.4%)とほぼ同数であった。また、日変化を有する風景では、特定の時間帯のみで時刻変化を捉えた単独日変化型が45景と、同じ風景で複数の日変化が感じられる複数日変化型の20景に比べて2倍以上となっている。単独日変化型では、夕の風景が26景と多く、夜の風景が18景と続く。複数日変化型の風景は20景が存在し、そのうち昼+夜の風景が8景、朝+夕と夕+夜は4景、昼+夕が3景、朝+夜が1景と僅かながらみられた。

視点場の位置別にみると、臨海部と市街地は、日変化が見られる風景がそれぞれ14景(77.8%)、17景(54.8%)と多いのが特徴で、中でも臨海部は単独日変化の夕方が12景と多く、市街地は夜が5景と多い。さらに、市街地は複数の日変化のうちの昼+夜が比較的多い。一方、台地、新淀川、都市河川は日変化が見られる風景の方が少ない。これらの視点場は、単独日変化の夕方の風景が比較的多いことが特徴である。中でも都市河川は、複数の日変化が6景と市街地に次いで多く、多様な日変化が見られる。

(ii) 季節変化について

図－５ 日変化の要素

表－３ 視点場と日変化による移ろい風景との関係

視点場	日変化あり										日変化なし				総計		
	単独日変化型				複数日変化型						合計		昼				
	朝	夕	夜	小計	朝+夕	朝+夜	昼+夕	昼+夜	夕+夜	小計	景数	%	景数	%	景数	%	
臨海部	0	8	4	12	0	1	1	0	0	2	14	77.8	4	22.2	18	100	
台地	0	6	4	10	0	0	0	2	0	2	12	38.7	19	61.3	31	100	
河川	新淀川	0	2	1	3	2	0	0	0	2	5	41.7	7	58.3	12	100	
	都市河川	0	7	4	11	1	0	1	2	6	17	43.6	22	56.4	39	100	
	市街地	1	3	5	9	1	0	1	4	2	8	17	54.8	14	45.2	31	100
	全体	1	26	18	45	4	1	3	8	4	20	65	49.6	66	50.4	131	100

表－４ 季節変化の要素

季節	季節変化の要素	出現景数	小計
春	時候・天文	－	－
	生活	休憩、花見	6
	行事	－	－
	動物	－	－
	植物	梅、桜、春の花、新緑、桃、コブシ、ボケ、タンポポ、バラ	28
夏	時候・天文	－	－
	生活	噴水、ボート	3
	行事	天神祭り、水都祭	3
	動物	セミ	1
	植物	蓮、菖蒲、バラ、ユリノキ	4
秋	時候・天文	秋の名月、秋の夕日、秋の雨	3
	生活	落ち葉掃き、銀杏拾い、読書	2
	行事	御堂筋パレード	1
	動物	秋の鳥、ホシハジロ	2
	植物	ススキ、紅葉、落ち葉、銀杏、カエデ、モミジ、桜の紅葉、ケヤキ、ハゼ、バラ、ヨシ	10
冬	時候・天文	冬の暮	1
	生活	クリスマスの飾り	1
	行事	－	－
	動物	ユリカモメ、冬鳥、カイツブリ、ヒドリガモ	7
	植物	－	－

表－５ 視点場と季節変化による移ろい風景との関係

視点場	季節変化あり												季節変化なし		総計	
	単独季節変化型					複数季節変化型							合計			
	春	夏	秋	冬	小計	春+秋	春+冬	夏+秋	春+秋+夏	春+秋+冬	小計	春+夏+秋+冬	景数	%	景数	%
臨海部	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	2	11.1	16	89
台地	2	1	3	0	6	3	0	1	0	0	4	1	11	35.5	20	65
河川	0	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	16.7	10	83
都市河川	6	2	1	0	9	4	2	0	0	2	8	4	21	53.8	18	46
市街地	1	1	2	2	6	1	0	0	1	1	3	0	9	36.4	22	64
全体	9	5	8	3	25	8	2	1	1	3	15	5	45	34.4	86	66

・季節変化の要素（表－４参照）

季節変化の要素は、時候・天文、生活、行事、動物、植物に分けることができた。季節別でみると、出現した 72 個のうち春が 34 個と約半数を占め、そのうち梅や桜などの植物が 28 個と大部分を占め、植物以外には休憩などの生活（６個）に出現するだけである。次いで、秋が 18 個と多く、その過半数（10 個）をススキや紅葉などの植物が占めるが、秋の名月（時候・天文）、銀杏拾い（生活）、御堂筋パレード（行事）、秋の鳥（動物）等と多様である。夏と冬は、それぞれ 11 個と 9 個で少なくなっているが、夏は時候・天候以外の 4 項目に出現数がばらついているのに対し、冬はゆりかもめや冬鳥等の動物が 7 個と多いのが特徴といえる。

・視点場と季節変化による移ろい風景との関係（表－５参照）

全体をみると、季節変化ありの風景は 45 景（34.4%）であり、季節変化なしの風景 86 景（65.64%）の 2 分の 1 程度に過ぎない。また、季節変化を有する 45 景では、特定の季節のみの時刻変化を捉えた単独季節変化型が 25 景であり、同じ風景で複数の季節変化を感じる複数季節変化型の 15 景に比べて 1.7 倍程度となっている。単独季節変化型では、春・秋が 9 景・ 8 景と若干多く、複数季節変化型 15 景では、春+秋の風景が 8 景とやや多い。

視点場の位置別にみると、都市河川は季節変化ありの風景が 21 景（53.8%）であり、季節変化なしの風景 18 景（46.2%）に比べて若干多いのに対し、他の視点場の位置は、季節変化なしの風景の方が上回っている。その中であって、台地や市街地は季節変化ありの風景がそれぞれ 11 景（35.5%）、 9 景（36.4%）と約 3 分の 1 程度を占め、両者とも単独季節変化型の風景が 6 景であり、複数型に比べやや多い。また市街地は、単独季節変化型が四季を通じてみられ風景の多様性がやや見受けられる。

(iii) 移ろい風景のまとめ

以上のことから、移ろい風景の数は、季節変化よりも日変化の方が多く、要素数では季節変化の方が多かった。日変化では、夕日や夕景といった自然現象が好まれているものの、照明やライトアップ等の人工現象も日変化を強く感じさせ好まれている。季節

変化では春と秋とが多くみられ、春を感じる移ろいの要素は桜などの植物に偏っている。秋は銀杏などの植物が多いものの、多様な移ろいの要素が感じられていた。冬はユリカモメなどの動物によって移ろいの要素が感じられている。視点場の位置別にみると、都市河川は、他の視点場に比べ季節変化を感じる風景が多く、また、複数の日変化も比較的多いことから移ろい風景を最も感じる場所といえる。市街地は日変化による移ろい風景を感じやすく、単独季節変化型が四季を通じてみられることから四季折々の移ろいも感じることでできる場所といえる。また、臨海部は典型的な日変化型の移ろい風景を呈する場所で、中でも夕方が顕著である。台地は、春と秋に季節変化の移ろいを感じる場所といえる。

４. まとめ

以上の結果および考察をまとめると以下の通りである。

好まれる風景の特性について、ランドマーク的な単体建造物や街並み等の人工物が「図」となり、大阪城公園などの大規模公園や水の都といわれた近世大阪の堀川の名残を受け継いだ大川・中

之島周辺の河川水面が引き空間となって風景が捉えられ、地形や緑といった自然物が「地」となって風景を支える基盤となっていた。この傾向は、特に臨海部、台地、都市河川で顕著であり、臨海部や都市河川での水系、台

地部での樹林といった自然物が存在することの重要性を裏付けている。また、これらの風景は、大阪の起伏の少ない地形構造が反映された水平方向の視線が多いことも特徴であり、建て詰まりのない広がりのある OS や河川流軸方向に視界の広がりを有する橋上が重要な視点場となっていた。一方、「図」の要素が自然物である場合、それらは公園植栽や河川敷の植栽などのまとまった緑空間であることから、緑を塊で確保できれば好まれる風景の「図」となりうることも分かった。

移ろい風景に関して、風景数では季節変化よりも日変化の方が多く、要素数は季節変化の方が多かったことは、都市内において季節変化による移ろいを感じることでできるポテンシャルの高さが伺える。日変化を捉えた結果より、夕日や夕景といった自然現象が好まれていることから、臨海部だけでなく夕陽丘という地名が残る上町台地からの視点場の確保も今後の重要な課題といえる。季節変化では、春を感じる移ろいの要素が大川沿いに代表される桜などの植物に偏っているのに対し、秋は御堂筋沿いの銀杏などの植物が多いものの多様な移ろいの要素が感じられていた。また、視点場の位置では、都市河川や市街地が季節変化や日変化を感じる場所となっており、河川水面や広幅員道路が引き空間として効果を発揮していることが推察できた。

参考文献

- 1) 田中一成（1996）：都市空間における記憶的イメージの抽出と空間変化指標との関係：都市計画論文集 31, 169－174
- 2) 小林享（1990）：気象景観体験における感覚印象操作の可能性に関する考察：造園雑誌 53(5), 199－204
- 3) 垣内宏美・山崎正史（2000）：都市景観における「図」と「地」の認知現象に関する考察：都市計画論文集 35, 769－774
- 4) 篠崎伸・志摩邦雄・小柳武和（1998）：歳時記的要素に配慮した都市の空間構成に関する研究－「ひたち都市環境写真コンテスト」応募作品と「江戸名所図会」の分析－：都市計画論文集 33, 727－732